P－36

緩和ケア実習前後における看護学生のスピリチュアリティの変化と影響要因に関する研究 －B 氏に焦点化した質的分析－

藤田真貴[1)]、中村勝[2)]
1) 新潟医療福祉大学 看護学科
2) 新潟大学大学院 保健学研究科

【背景・目的】スピリチュアリティとは自分自身および自分以外と非物質的な結びつきを志向する内発的なつながり性と定義され（比嘉、2002）、自己肯定や自己受容に関する「自覚」、自己の存在意義に関する「意味感」、将来の夢や目的に関する「意欲」、自然や先祖との結びつきに関する「深心」、価値観や人生観に関する「価値観」の 5 つの側面がある（比嘉、2002）。さらに、Musgrave によるとスピリチュアリティは教育や信仰によって高まり、看護学生のうちから終末期ケアに対する考えを深め、高めることが重要としている（Musgrave、2004）。しかし、どのような教育が看護学生のスピリチュアリティに影響を与え向上に役立つかは明らかでなく、学生の学習体験を通じて明らかにする必要がある。

そこで、本研究では看護学生のスピリチュアリティを既存尺度を用いて評価し、スピリチュアルケアと関連が深い緩和ケア実習の前後で変化の有無を比較することにした。変化があるとすれば、どのような体験が影響要因となったかを質的分析から明らかにしたいと考えた。

【方法】対象はＡ大学看護学科に所属する 4 年生 86 人。調査期間は 2017 年 5 月 17 日～2018 年 3 月 31 日。調査方法は緩和ケア実習の参加前後で「スピリチュアリティ評定尺度」に記入してもらい、ウィルコクソンの符合順位検定を用いて前後の有意差をみる。さらにスピリチュアリティの 5 つの構成要素ごとに前後の有意差をみる。その結果、有意差のある対象を選定し、実習で印象に残ったこと、他の実習との違いなどについてインタビュー調査を行なった。インタビューデータは質的統合法により分析し、スピリチュアリティが変化した要因を明らかにする。今回は実習前後でスピリチュアリティ評定尺度に有意差を認め、インタビューの同意が得られた B 氏を中心に報告する。倫理的配慮として調査協力は任意であり、同意を得て実施した。新潟医療福祉大学倫理審査委員会の承認（17816－170517）を得た。利益相反関係にある企業等はない。

【結果】B 氏の緩和ケア実習前後のスピリチュアリティ評定尺度の結果はウィルコクソンの符合順位検定（p 値 =0.000）であり、有意差が認められた。質的統合法ではラベル 54 枚、2 段階のグループ編成を経て、8 枚の最終ラベルに統合された（【】で示す）。B 氏は緩和ケア実習後の【自己認識の変化】として患者の側にいることにより終末期患者に安心感を与えるなど、自分にもできることがあることに気がつき自分に自信がついたと述べている。また【傾聴の重要性の理解】として適切なケアには患者の立場にたって考えられるように傾聴が大事であると改めて学んだが、ただ聴くことだけが傾聴でないのではないかとの疑問も感じた。このような体験後【自分の中の意識の変化】があり、他の学生に対し看護観や人生観を問いかけることで自分の目指す看護について考えるようになったとしている。さらに【他者との関わりの重要性の理解】として孤独感を抱えている終末期患者にとって病室から出て他者と関わることは終末期患者の抱える孤独の軽減になるとしている。このような体験後【スピリチュアルペインを抱える患者との関わり方の理解】も深まったとしている。看護師が患者のスピリチュアルペインに気づき、患者は一人ではない、自分はいつも患者を気にかけていると伝える事が患者のスピリチュアルな緩和につながると看護師自ら気づき、いつも気にかけていることを伝える重要性の理解を示していた。また【緩和ケアにおいて重要な看護の理解】として外に出たい希望が強かった患者を外に連れ出したことで表情が穏やかになったことから、終末期看護において患者の希望にこたえるように最適の方法を工夫することが重要と学んでいた。同時に【緩和ケア実習を通して今までの実習の振り返り】として入浴介助の際に患者の希望に合わせていたり、体の状態に合わせてちょっとした工夫をしている様子を見学して、それまでは患者の希望を叶えるなど考える余裕もなく、ケアに精いっぱいで患者を見れていなかったと感じていた。また外に出た患者の表情や言動の変化から【自然に触れる事の重要性の理解】として、今まで意識したことがなかったが、光とか風など自然に触れることが生きている実感につながると実習で気づくことができた。

【考察】3 年次の領域実習では 2 週間を通して看護計画の立案と実施を目的とするため、死に直面する重症患者を受け持つことがなく、また自宅で家族の死を見取った経験のある学生も少ない。B 氏も同様であった。しかし緩和ケア実習を通じて患者の孤独を軽減することの重要性に気づくと、自分にもできることがあるという自信からスピリチュアリティの 5 つの側面の 1 つである「自覚」が強化され、さらに自然と触れ合うことが生きる実感につながると気づくと「深心」の強化につながり、患者の希望を叶えるための看護師への観察が看護とは何かを考える契機となり「意欲」の強化につながったと考える。これらの全体的な経験知がB氏のスピリチュアリティの向上につながったと考えられる。

【結論】緩和ケア実習に参加した B 氏のスピリチュアリティは向上していた。その要因として「自覚」、「深心」、「意欲」の高まりがみられた。